

総合博物館

青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻145号 平成20年(2008)12月1日 Vol.39 No.3

企画展



放浪の画家が描いた明治の青森

蓑虫山人(1836~1900)の本名は土岐源吾。岐阜県出身の画人です。10代半ばから、日常道具を入れた笈(広げるとテントのようになったという)を背負い全国を旅しました。本県には明治11年から同20年に滞在しました。蓑虫が来県した理由のひとつに考古資料の収集があげられます。初めて下北半島に向かったのも、石の鑿(やじり)が出るとの情報をつかんだからとといいます。佐井村・箭根森八幡宮(やのねもりはちまんぐう)には、蓑虫がスケッチした勾玉(まがたま)や耳飾りなどの装飾品・石器類が、現在も保管されています。

蓑虫は、亀ヶ岡遺跡の発掘でも有名です。山人の旅の絵日記である「写画」(個人蔵、上段写真)にもその場

面があり、明治17年頃からたびたび発掘していたようです。蓑虫が神田孝平(東京人類学会初代会長)に発掘の様子を伝えた書簡が「人類学会報告」に掲載されたことで、この重要な縄文遺跡が全国に知られるようになりました。

蓑虫が収集した考古遺物は「陸奥全国神代石井古陶之図」(個人蔵、下段写真)などに記録され、集大成されました。土器・石器の当時の所蔵者や出土地が付記され、丁寧に描かれています。このような絵屏風が確認されているのは、本県だけです。

蓑虫のこうした作品が受け入れられたのは、人々が考古遺物に高い関心を持っていたからでしょう。本県考古学史における蓑虫の仕事を再確認する意味からも、この企画展が、その手初めとなれば幸いです。(太田原慶子)



【会期】11月22日(土)~平成21年1月18日(日) 9:00~17:00 ※年末年始(12/29~1/3)以外は無休

【料金】11・12月一般310円(250円) 高校・大学生150円(120円) ※ () は団体料金

1月一般250円(200円) 高校・大学生120円(100円) ※小・中学生、障がいのある方は無料



土曜セミナー

並列・立体交差する津軽の用水路

主任学芸主査 齋藤 岳

「津軽地方にしか見られないもの」として私は、津軽平野や青森平野西部にみられる並列する用水路をあげたいと思います。これは、日本全国を探しても他の地域ではみられません。

津軽の用水路は、並列するだけではなく、樋(と)い)などで立体交差するなど、錯綜(さくそう)しています。近年では耕地整理等によって、かなり少なくなりましたが、まだまだ各地に残っています。なぜ、こういった用水路がみられるのでしょうか。

水不足が理由としてあげられることがあります。しかし、それは全国各地でも問題となっているのに、津軽のような用水路は、他では見られません。

岩木川下流域は土地の傾斜が緩やかで水源から遠いため、用水路が長くなり、並列しやすい状況にあることは確かです。しかし上流の扇状地域、そして中小河川を水源とする青森平野西部でもみられるので、地形だけの問題ではありません。歴史的・文化的な要因が考えられます。

並列する用水路は水田の中を縦横に走り、ながら「用水路帯」とでも言いたくなるような、帯状の荒地地として見えることがあります。また、宅地化の過程で用水路が住宅地に組み入れられ、用水路の上に家が建っている例も見受けられます。

並列する用水路はやがて分岐していきりますが、これにより三角形の地割りが増えます。そのために



小区画の耕作地が生み出され、分岐点に近い狭い土地は畑になります。その背後に家屋が建てられている例もみられます。用水路は、津軽地方の景観に影響を与えているのです。

北常盤駅の東側に見える用水路



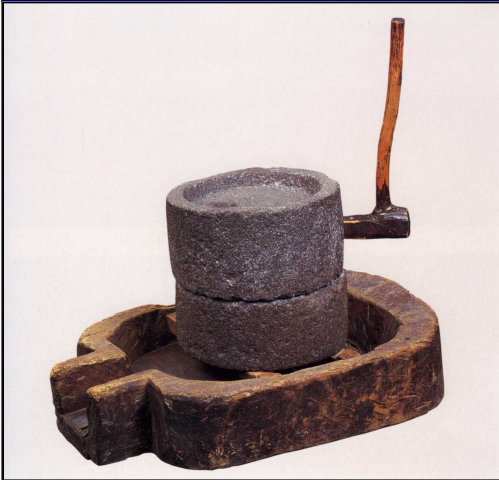
並列する津軽の用水路

近年、「文化的景観」という考え方が重要視されるようになってきました。それは、人と自然の歴史的な相互作用によって生み出された景観のことで、アジアの棚田などが代表的な例です。初めはユネスコの世界遺産の中に、そして今では日本の文化財保護法の中にも取り入れられるようになり、特に重要なものは、保護の対象となっています。

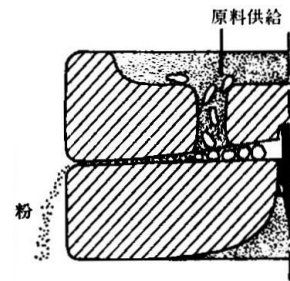
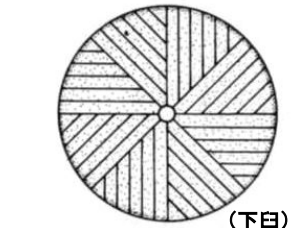
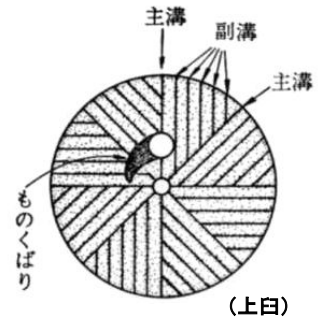
並列する津軽の用水路も、津軽の人と自然の歴史的な相互作用の結果であり、文化的な景観であると、私は思います。津軽地方では江戸時代に大規模な新田開発(しんでんかい)が行われ、そのため水不足がひんぱんに発生しました。深刻な水争いの記録も数多く残っています。用水についての秩序も長い年月をかけて形成されたことでしょう。もしかしたら用水路を統合せず、用水の分配を形として土地に刻み込むことにより、小さな水争いが減少したかもしれません。

これらの用水路の形成過程や、用水路が今も残る理由・背景・事情を解明できれば一例えば先人の水確保の苦勞の文脈で解明できるなどすれば一特定の場所においては、津軽独特の文化的景観として保全を図る発想に結びつく可能性があります。私は、そのための調査の必要性和意義を強く感じており、不明な部分の解明に尽力していきたいと思っています。

(11月1日／当館小ホール)



石臼（いしうす）は、穀物を挽（ひ）いて粉にする道具で、県内ではシギウス（挽き臼）ともよばれました。以前はどの農家にもあった生活必需品で、コメ・ムギ・ソバなどを挽いて、シトギ・餅・団子・麺類などに調理して食べました。また、水に浸した大豆を挽いて豆腐も作りました。しかし、昔の農家では、豆腐は今のように日常的な食物ではなく、冠婚葬祭や



盆・正月など「ハレの日」の食物でした。

石臼の起源は古く、紀元前7世紀頃、中央アジアに出現し、中国を経て日本へ伝来しました。一般に普及したのは、江戸時代の初期といわれています。

石臼は、上臼と下臼とからなっています。上臼の穴から穀物を入れ、取手を回すと、上下の臼の間に挟まれた穀物が砕け、粉が出てきます。回転させる方向は、左回り（反時計回り）にしなければなりません。逆に回すと、粉がスムーズに出てこない仕組みになっています。上下の臼には独特の刻みがあり、これにより粉が外側に出てくる構造となっているからです。

粉挽きには他に、臼・杵や水車なども用いられました。動力機械による製粉所が各地にできて石臼は使用されなくなり、現在は全くその姿を消しています。さらに工場生産の粉類が出回り、それを農家でも買って使うようになりました。しかし、工場的高速回転の製粉機で作られた粉は、高い摩擦熱（まさつねつ）によって穀物の成分が破壊されることとなります。それに比べて、石臼でゆっくり挽いた粉は成分に変化がなく、美味しいのだそうです。

【参考】図＝三輪茂雄『臼（うす）』（ものと人間の文化史25 法政大学出版局 1978年）より 一部改 （成田 敏）

一生に一度

誕生した赤ちゃんの名前を書く紙は、「命名書」「命名紙」と呼ばれる。偶然、それを書いている場に立ち合うことができた。

かつて青森市内では、誕生7日目に名前を付け、半紙に名前を書いて神棚や床の間へ貼り、親戚を呼んで祝ったという。五戸地方では、幾つか名前を書いた紙を丸めて升に入れ、神棚で拜んだ後、子供にその中から一つ紙をとらせ、本名を選んだという。

このような人生の節目に関わる習俗は一生に一度しかないのだから、フィールドワークで記録撮影できるチャンスは滅多にない。たまたま遭遇すると、大変貴重な資料となる。個人の記念写真ではなく、あくまでも後世の人が見たときに、その場全体の雰囲気や道具類もわかるように記録したい…。などとやっていると、当事者でもないのに、シャッターを押す指が震えたりする。

この一枚



命名「爽」（平成20年撮影／青森市）

（小山隆秀）

平成20年度行事予定（12月～平成21年3月）

○特別展・企画展

11/22(土)～平成21年1/18(日)
「蓑虫山人と青森～放浪の画家が描いた明治の青森」
3/3(火)～5/6(水)
「サムライ・チャンバラ博覧会」

○記念講演会（蓑虫山人関係）

11/22(土)「蓑虫山人の仕事」
ゲストキュレーター 三上強二氏
12/6(土)「蓑虫山人の絵に描かれた考古資料」
ゲストキュレーター 福田友之氏

○催し物

12/20(土)～平成21年1/18(日)
ふゆやすみ「郷土館クイズラリー」
平成21年1/11(日)
ふゆやすみ「づぐり回し大会」

○工事休館のお知らせ

平成21年2月1日～2月28日



○土曜セミナー（12月～平成21年3月）当館小ホール

- 12/6 蓑虫山人の絵に描かれた考古資料
 - 12/13 青森県の絶滅種（ほ乳類と鳥類）
 - 12/20 世界遺産を歩く
 - 12/27 民俗学における正月行事の基礎・基本
 - 1/10 水晶製の石器
 - 1/17 『忍ぶ草』と横岡兄弟～弘前藩と蝦夷地警備
 - 1/24 位牌堂とは
 - 1/31 青森県の農業はすごい～害虫駆除その（2）
 - ※ 2/7 菅江真澄の絵を読む（1）
 - ※ 2/14 歌曲でつづるあおり昭和史
 - ※ 2/21 菅江真澄の絵を読む（2）
 - ※ 2/28 プレ講座「サムライ・チャンバラ博覧会」
 - 3/7 近世後期津軽の漁業史
 - 3/14 明治期に英国に渡った水彩画家～松山忠三
 - 3/21 渋沢敬三の見た津軽
- ※会場＝青森市福祉増進センター「しあわせプラザ」

【特別展】 団塊世代の青春時代～よみがえる昭和40年代～



特 別展「団塊世代の青春時代～よみがえる昭和40年代」は7月25日から9月28日まで開催され、約1万1千人が足を運びました。会場には当時の電化製品、新聞の折込みチラシ、映画ポスター、雑誌などが展示され、昭和40年代のダイニングキッチンや子ども部屋も再現されました。おもちゃコーナーには、テレビ番組やCM関係のソフトビニール人形やゲーム盤が並びました。

当時の住宅地図と風景写真を展示したコーナーは特に人気が高く、暮らしていた場所を熱心に探す人の姿を多く見かけました。また、テレビスタジオを再現した第二会場では、記念講演会やA TV青森テレビのアナウンサーと一緒にニュースキャスター体験やクイズを楽しむイベントが行われました。

今回は、高度経済成長と大量消費社会の到来にわく当時の世相とライフスタイルを紹介し、それぞれの昭和40年代をふり返っていただきました。思い出をまじえた感想に寄せて、早くも、昭和50年代展の開催を望む声が挙がっています。

写真上＝庶民の住宅（再現） 下＝記念講演会（川口浩一氏）

【共催展】 ジュディ・オング倩玉 木版画の世界



木 版画作家としても知られるジュディ・オングさんの作品展が、10月11日から11月16日まで開催されました。2005年の日展特選受賞作「紅楼依緑」など、珠玉の約65点が一堂に公開されました。開会式にはジュディさんも来場し、ミニトークやサイン会でファンと交流しました。全体の来場者は約2万3千人。「色彩感覚が素晴らしい」「日本家屋の美を再発見した」「精密さに感動」と、あちこちで賞賛の声があがっていました。

写真＝サイン会のようす（10月11日/当館小ホール） ※倩玉＝青

総合博物館 青森県立郷土館だより Vol.39 No.3 通巻145号 2008.12.1

【編集・発行】総合博物館 青森県立郷土館

〒030-0802 青森市本町二丁目8-14

【TEL】(017)777-1585(代)【電子メール】E-KDGAKUGEI@pref.aomori.lg.jp

【ホームページ】http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/kyodokan.html

